

「わたしたちを救いうる名」 一使徒行伝講解説教 9-

詩篇
使徒行伝

第108篇22節～25節
第4章 1節～12節

説教 本庄侑子 牧師

足の不自由だった男が立ち上がったことに驚き、集まってきた人々の前でペテロが説教をしていた時のことです。ユダヤ人指導者たちが近寄ってきました。祭司たち、宮守がしらは、神殿に責任を負っていた人たちでした。サドカイ人は教養人で、彼らの知識では起こるはずのない復活を否定していました。彼らは、ペテロたちが神殿の秩序を乱し、復活を説いていることにいら立ち、捕え、翌朝まで留置しました。

一方、留置場の外では、ペテロの説教を聞いて信じた人々の数が膨れ上がっていました。説教は、ただイエス・キリストの情報を伝えるものではありません。聖霊のお働きにより、説教者が語る言葉を通して主イエスが人にお出会いになり、信仰をお与えになります。教会や人生においてもそうです。閉じ込めても膨れ上がり、進んで行く聖霊の業、神の出来事があります。

それは、ペテロたちを捕えた人々にとっては恐るべきことでした。彼らはほんの数日前、神がお遣わしくださった救い主を邪魔に思い、十字架にかけた人々でした。やっとのことで主イエスを殺し、これがかつての秩序や自分たちの支配が回復すると思っていたのに、今度は主イエスの復活を信じ、宣べ伝える人々が膨れ上がっていくのです。なんとしても、この動きを封じなくてはならないと思ったことでしょう。

こうして最高法院が開かれました。主イエスが捕らえられ、殺された時と同じです。今度はペテロたちが真ん中に立たされています。しかし、聖書は語ります。「その時、ペテロが聖霊に満たされて言った」(8節)。この時、ペテロを満たしていたのは人の力ではなかった、「聖霊」だったのだ、と。

数日前、主イエスが捕えられた時、弟子の一人は相手を剣で切りつけ、右耳を切り落としました。主イエスが連れて行かれた時、ペテロは主イエスとの関係を三度も否定しました。鶏が鳴き、その姿を主イエスに見つめられた時、かつて主イエスが裏切りを予告しておられたことを思い出し、ペテロは激しく泣きました。

そのペテロが今や、剣を振り上げることなく留置場に閉じ込められ、逃げ惑うことなく裁判の場に引き出されるままです。ユダヤ人指導者たちがいら立ち、忙しく立ち働いているのとは対照的です。かつての自分を反省し、自己変革を経て、このような姿になったわけではありません。

ん。あれから、主イエスの死と復活、昇天、聖霊降臨がありました。聖霊がペテロに満ちて、このような姿にしたのです。

聖霊に満たされていたペテロは、捕えられる前と同じことをしました。イエス・キリストを宣べ伝えたのです。福音を自らすすんで聞くはずのない人々が、奇しくも勢ぞろいしてペテロを囲み、説教を聞くことになりました。人の目には、人の思惑や敵意がペテロたちを囲み、なきものにしようとしているように見えた時、ペテロの目には、聖霊が彼らを囲み、恵みをあらわそうとしておられるように見えたのでしょ

う。そんなペテロの言葉には、その場にいた全ての人々を包み込む、限りない愛と赦しが伴っていました。ユダヤ人指導者たちは、神の家を建てるように選ばれた民でした。しかし、神の計画を受け入れられず、主イエスを殺してしまいました。神は、その主イエスを「隅のかしら石」(11節)になさいました。隅のかしら石とは、家の隅に置かれ、家全体を安定させる親石です。彼らが捨て、殺した主イエスを、神は復活させ、天に昇らせ、教会の親石としてくださいました。

ペテロは、かつて主イエスを殺し、今、自分たちをも抹殺しようとしている人々に対して、この主イエスは「わたしたちを救いうる名」(12節)だと語りました。私もあなた方と同じだ。いや、あなた方以上に罪人だ。そう痛感していたからでしょう。ペテロは、主イエスを裏切っただけでなく、主イエスにサタンよばわりされたことがありました。この後も、後輩パウロに罪を指摘され、叱責されることとなります。

私は何一つ良いものを持っていない。持っているとしたら罪でしかない。今の自分があるのは、ただ、主イエスの恵みによる。あの日、裏切ることをご存知の上で私を選び、私を思って祈ってくださったお方。裏切った私を赦し、愛するために、復活して再び会いにきてくださったお方。そしてなお、私を信じて大切な務めを託し、全うさせてくださるお方。このお方が世界を統べ治め、私たち一人一人の神でいてくださるとは、なんといいグッドニュースだろう。

「この人による以外に救はない。」(12節)聖霊がペテロに与えた信仰告白を私たちもまた与えられて、今日ここにいます。そしてこれからも、この聖霊の業は膨れ上がっていくのです。

(記 本庄侑子)